

空

平成29年4月30日発行

第15巻3号

通巻第72号

空



2017・4・5

SORA 72号

直方 吉田悦子

置いて来し恋の一片冬桜

肺を病むあなたの寢息虎落笛

禁制に触れたるやうに夜火事見し

湯上がりの火照りを冷ます夜半の雪

九十五の母に刻みし雑煮餅

須惠 苑 実 耶

春の雪足の跡より溶けはじめ

ロボットに呼び止めらるる鳥曇り

春待てり三角中に腕預け

猫の子の出てゐる寺町通りかな

展けたる車窓に海と菜の花と

神奈用 窪みち子

膨らめるだけ膨らんで初雀

九十九里浜弧をゆるやかに鮎鱈鍋

豆撒くや帰宅の遅き子の部屋も

玄関に車椅子寄せ梅近し

教へ子も師も白髪や春立つ日

兵庫 岩井京子

賜りし若餅の赤よく伸びて

初春の日ざしの中や髪軽し

初鏡少し困つた顔になる

覚めて笑む初夢なりき佳しとせむ

にこにこと弾み降りくみ初雀

福岡 田代貞香

袴のぶつかり合ひて豆を撒く
豆撒くや見栄切るやうに役者の手
豆を撒く鬼の棲みつく納戸より
冬の日の端まで届く写経の間
子に絵本選ばせてゐる春の街

兵庫 林徹也

隣室に母の寢息や去年今年
今年限りと詫ぶる賀状を書きにけり
施設より不在と戻る年賀状
キリストの如き脾腹や初湯殿
卒寿の手とりて上座へ初句会

北海道 押田裕見子

切らるるも血は流さざる凍れ鱈
人の手に渡りし生家月氷る
人影のいよよ鋭く寒に入る
日の落ちし雪の外湯に首浮かぶ
うつつとも愛日に舞ふ小米雪

大阪 井上和子

百体の雛の眼真つ向へ
蝶死して紋の浮き立つ寒の水
笹叢は風のささめく涅槃かな
如月や遺品の羽織男紋
花冷や仕立直しの糸扱く

北九州 横田敬子

老人はふるさとを捨て寒鼻
名を呼べば尻尾で応へ竈猫
新聞の集金早し年の暮
百歳に近づく母や今朝の春
手を洗ふ母に湯を注す寒九かな

東京 山田正子

てのひらの運命線に春の水
流し雛別れあること子に教へ
狐雨野の陽炎を沈ませる
団子屋の五珠そろばん福寿草
捨畑にぶつきらぼうな葱坊主

山梨 野畑さゆり

侘助や遠廻りする遊歩道
墓域への径山茶花のほつほと
梅日和母の香残るシヨールかな
支へ合ふ老いの暮しや梅香る
春隣夫のなじみし甲斐ことば

東京 遠山のり子

受験子に通路を譲る朝の駅
参道の松の高きを春疾風
雪柳かすかな風にもつれたり
古民家の傾く屋根や梅の花
仏像の遠まなざしや春惜しむ

東京 今井康子

達磨市まで一万歩蕎麦団子
三ヶ月の胎児の写真水温む
そつげなく見せし父情や受験生
雛菓子は小さき器が似合ひけり
もう少し優しく撫でて春一番

春日 三井所美智子

落椿まとめ祀られ道祖神
クレソンを摘むクレソンを踏みながら
何回も噓する夫煩はし
佐保姫の百人入る窟かな
浮かれ猫尻尾の怪我の痛々し

福岡 樋口みのぶ

紙の上の砂鉄のをどる春隣
菜の花や雲ひとつなき海の色
猫逝きて忘れてゐたる雛かざり
猫は鈴残して死せり春の月
卒業の寄せ書き君と並べ書く



・第六回「空新人賞」受賞作品・



押田裕見子

この度は新人賞をいただき、ありがとうございます。心から感謝いたします。

〈日記には書かず忘れず髪洗ふ 柴田佐知子〉
偶然、新聞で目にしたこの句に動揺した日のことを思い出します。本心を本気で詠み上げる柴田先生の句に触れてみたいと強く思いました。以来、「空」とのご縁を得て、柴田先生の句と出会えることを楽しみに、「空」が届く日を心待ちにしています。未だ季語の使い方に思い悩んでおりますが、柴田先生はじめ皆さまの句に習い、自分らしくゆつくりと明け暮れのうたを紡いでいきたいと思います。

一斉に空押し上げて花辛夷

群なさぬ一羽を残し鳥雲に

ふらここを漕いで涙を払ひけり

春の風邪樹海に沈むごと眠る

緋の牡丹手折りて胸の炎となせる

術後の眼ひらけば糸の青時雨

知恵を持つヒトとて掛かる蜘蛛の糸

萍を分けて怪しげなる背鰭

うつむけば我も小さき蝸牛

日焼子をよく眠らする青畳

血の騒ぐ女をねらふ蚊の羽音

生き物の影を引き込む青葉闇

空つぼの胸にしだるる夏柳

昼の蚊の途方に暮るる奥座敷

水打つて若き僧侶を迎へけり

子の触るる盆灯籠のよう廻る

行く方もいづれ来し方鱗雲

その中に鳴くを怠けてゐる虫も

言訳のひらいて閉づる秋扇

剥製の熊が牙むく月の宿

ストーブの前に陣取る男かな

ばあちゃんと呼ぶるるに慣れ大根煮る

もう一度会ひたき人へ賀状書く

白鳥の恋の鞘当て波しまく

雪眼鏡苦手な人を遠くせり

飾らずに生きて来し母寒椿

雪明り病臥の母の薄く透く

ひと啼きに百羽呼び寄す雁の長

嫌はるるほどは愛さず雪女

雪の戸の向かうに誰かゐるやうな

空集抄
柴田佐知子抽出

開戦日あの日も海に海鼠舟

諍へる白鳥水を汚しけり

大岩を乗り出して灌凍てにけり

火の匂ひせり猪撃ちの入りし山

時に私語混じる寒柝過ぎゆきぬ

子の墓や仕ふるやうに竜の玉

爪先に力を入れて野焼見る

春日射す背なより充電するやうに

綿虫の人の高さを飛び交へる

春愁や居間にあれこれつめ込んで

角野良生

松田明子

岸洋子

深川淑枝

曾根富久恵

白水良子

高倉和子

織田高暢

戸栗末廣

亀井紀子



紅梅やすいと身に添ふ割烹着

声変りせし子の敬語初電話

立春の靄の中より調教馬

夜桜のしぶき浴びたる天守かな

恋猫に獣の匂ひ濃くなれり

入学児元気な声をほめらるる

春立つや魔除けの鈴に土の音

寒椿いつそ悪女になろうかとも

山笑ふ画鋏のあとに画鋏さし

眦をつり上げ恋の猫となる

焼餅に仕上げの印やうららけし

冬木の芽ペン胼胝といふ力瘤

マスクして帽子被りてあんだ誰

西住三恵子

山内 碧

中田みなみ

吉田 葎

石橋幾代

柴田志津子

山本則男

吉田悦子

千波 悠

原 友子

永淵恵子

田岡千章

横田敬子

散らかしてうろろするや冬仕度

心臓は働き続け冬北斗

剪定師あすへ残しておく梯子

庭にゐて充たされてゆく名草の芽

雛祭薄くなりたる蒙古斑

海暮れて風吹きかはる節分会

鴨歩く凶鑑通りの脚の縞

死にさうにないと百歳梅香る

ブロック塀倒す勢か恋の猫

春雪の消えて淋しき庭もどる

笹鳴や土橋を過ぎて石橋へ

凍蝶のいのちはなるる震へかな

元旦や子が来て孫も犬も来る

田坂能雄

天谷翔子

兒玉充代

河原敬子

仲里奈央

大西乃子

岩井京子

青木朋子

宮井知英

森田明成

井上和子

えとう樹里

田代貞香



笑ひ声聞こえさうなる初写真

川舟の水ぬき穴より春の草

足元は春火鉢なり乾物屋

柀挿す古びし町の裏通り

うららかや金平糖を身ほとりに

長き紐引いて緩めて猿廻し萩

終の地と定めてみれば冬怒濤

突然の告知に雪の降りはじめ

バレンタインデー猫待つ家に帰りけり

寺へ行く一族のみな着ぶくれて

桜餅夫とはたわいなき話

奥の間や闇夜に雛の息づかひ

鴨鍋の鴨ひらひらと取り分くる

押田裕見子

田中とし江

古賀眞理

窪みち子

小島翠波

萩悠子

桐山甫

畑由子

岡村尚子

立花一枝

田邊豊子

石井みゆき

三井所美智子

空作品評

柴田佐知子

作者は自在な言葉の運びによって、独自の世界を作り出してゆく。春の日差しを受けてほんのりぬくもつてゆく感覚が、〈充電するやうに〉と感度のいい措辞で表現されている。

諍へる白鳥水を汚しけり

松田 明子

立春の霽の中より調教馬

中田みなみ

水鳥の争う姿は〈千里飛び来て白鳥の争へる 津田清子〉へ水鳥の争ふ水の上に立ち 伊藤 通明など印象鮮明な句を思い出す。写生の眼の力を持つ明子さんは、見落としがちなへ水を汚しけり〉に焦点を絞り白鳥の諍いの様を活写。

大岩を乗り出して瀧凍てにけり

岸 洋子

曆の上では春となっているが、寒さはさほど変わるわけではない。しかし、立春というだけで心なしか春めいた気分となってくる。いささかの晦渋も浮ついたところもない。実景をありのままに描いているのだが、おらかな言葉の選択と調べによって柔らかな情感が生まれている。

夜桜のしづき浴びたる天守かな

吉田 菀

裾まで完璧に凍った滝は一度しか見たことがないが、水の勢いのままに凍っていた。それは躍動感に驚いた美しさであった。掲句は〈乗り出して〉という表現を得たことよって、凍りついた躍動感が力強く捉えられている。

桜と城という組み合わせは、絵葉書のような面白味のない句になりがちでなかなか難しく作句を諦めたくなる。菀さんは果敢に挑戦。一気に詠み下ろして鮮やか。類句類想を恐れず、このように挑戦したい。

春日射す背なより充電するやうに 織田 高暢

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

根性をかたちにすれば山の芋

福岡 角野良生

このセーター着るころいつも母の忌くる

開戦日あの日も海に海鼠舟

いま落ちし葉にはかまはず落葉掃く

地下街に方位失ふ十二月

身の始末考へてゐる春炬燵

炉火燃ゆる文字なき民の掟唄

絵双六休んでみたき宿ひとつ

熊本 松田明子

川止めに遭ひてとどまる絵双六

鈴の音の座敷にこぼれ投扇興

点画をおろそかにせずお書初

諍へる白鳥水を汚しけり

白鳥の首と首とが争へり

大岩を乗り出して瀧凍てにけり

福岡 岸 洋子

呼ばれても春泥ひと跳びとはいかぬ

おぼろ月和毛つまりし猫の耳

春寒し服脱ぐたびに背の縮む

灯点して途方に暮るる寒さかな

漆黒の闇割り貫けり寒三日月

追ひ込みの無線をつけし狩の犬 北九州 深川淑枝

火の匂ひせり猪撃ちの入りし山

青空の返す餌や猪撃たる

銃音へ青たばしりぬ狩の天

鬨はぬ蹴爪の長し霜柱

雲雀鳴く空へ段なす石切場

時に私語混じる寒柝過ぎゆきぬ 直方 曾根富久恵

煤逃げのすぐに戻りてきたるとは

病む母の枕辺に置く追儺豆

理髪屋のタオル純白寒明くる

あたたかや長者原てふ駅の名も